

2026 年 MIC 長崎フォーラム アピール

明日 8 月 9 日、長崎は原子爆弾が投下されてから 81 回目の祈りの日を迎えます。いま、日本の「非核」というアイデンティティは、かつてない重大な岐路に立たされています。ウクライナ侵攻や緊迫する国際情勢を背景に、現政権をはじめとする政治の間からは「非核三原則の見直し」や「核共有」の議論を容認する発言が相次いでいます。長崎の地からも、この極めて危険な動きに対して強い抗議の声が沸き起こっています。

歴史を振り返れば、「非核三原則」の出発点は決して平坦なものではありませんでした。1960 年代末からの沖縄返還交渉の渦中、沖縄を「核抜き本土並み」で取り戻せるのかという激しい議論と野党と政府による激しいせめぎ合いの狭間で、この原則は次第に形作られていきました。当時の佐藤政権の不透明さがあり、危うさを孕みながらも、当時の国会の徹底的な議論とメディアの厳しい監視、そして第 5 福竜丸事件以降に起きた強力な世論の力が、結果として「非核三原則」に「国是」としての重みを与えました。

しかし、現在の政治情勢は当時と大きく異なります。国会における「一極集中」が進んだ結果、かつてのように時の政権に政策転換を迫るほどの野党との緊張感あるせめぎ合いや、多角的な議論を通じたブレーキ機能は著しく低下しています。歴代政府が堅持してきたはずの「非核三原則」は、今や「核の傘」というジレンマのなかで形骸化し、国民的議論を置き去りにしたまま「非核三原則の見直し」が議論される現状に、私たちは強い危機感を抱かざるを得ません。

本日のフォーラムでは、被爆者代表として安倍首相（当時）らを前に「平和の保障」を訴えた城臺美彌子さんから、現在の「非核三原則の見直し」の動きに対する深い危惧と平和への強い信念を伺いました。また、梅原季哉さんからは、非核三原則の曖昧な成り立ちの歴史と、日本が本来国際社会で果たすべき役割について歴史的分析を学びました。被爆者の核廃絶への願いと、政治の現実。このギャップを前に私たちメディアや情報・文化に携わる者が果たすべき役割は明白です。

「戦争は、始まってからでは止められない。核兵器は、使われてからではもう遅い」

私たちメディアの使命は、何かが起きたときに報じることだけではありません。国会に代わって権力を厳しく監視し、「非核三原則」の形骸化を許さず、何かが起こる前に社会へ鋭く警鐘を鳴らし続けることこそが、私たちの使命であり最大の責任です。

被爆者のいない時代がやがて訪れようとも、長崎で受け取った「叫び」と平和への願いを、私たちは決して絶やしません。たとえ小さな記事、一文であっても、それは未来の平和を動かす確かな力になると信じています。

この長崎に集ったこの瞬間を、新たな決意の場としましょう。核なき世界の実現に向け、主体的かつ未来志向の行動を起こすため、私たちはそれぞれの現場から言葉を刻み、伝え続けることをここに強く宣言します。

2026 年 8 月 8 日

MIC 長崎フォーラム参加者一同
日本マスコミ文化情報労組会議
長崎マスコミ・文化共闘会議